# この人に聞く

YES,元気
未来にチャレンジする健康開発企業
TAMURA

創業以来、「未来にチャレンジする健康開発企業」を事業目的とし、内服固形製剤やドリンク剤等の自社製造および受託製造を行っています。
また、SDGs にも積極的に取り組んでいます。

田村薬品工業株式会社　代表取締役社長
田村大作（たむらだいさく）氏

2022 年 1 月 25 日、同社・応接室にてインタビュー

## ▶医薬品メーカーとしての地位を確立

**── 御社の概要についてお教えください。**

当社は 1934 年創業、1948 年設立の医薬品等を製造販売する企業で、現在 75 期を迎えます。医療用医薬品、一般用医薬品（OTC）、健康食品、清涼飲料水と幅広いジャンルの自社製品を製造販売するほか、自社製品以外に大手メーカーの受託製造も手掛けています。私は三代目になりまして、祖父の田村信一（しんいち）が初代の経営者。二代目が、現会長である父の田村恵昭（しげあき）です。

当社は、創業以来、「未来にチャレンジする健康開発企業」を事業目的とし、「医薬を基本に健康を創造し、提供する企業を目指そう」をモットーに取り組んできました。そして、これまで 4 つの段階を経て発展してきました。最初は配置薬からスタートしています。これが第 1 期です。第 2 期は、2 代目社長の時に、日本の経済成長に伴ってドラッグストアや OTC 市場へ進出するため大手メーカーからの受託製造と自社製品の製造を拡大させ、さらにはドラッグストア、薬局への販売を増やしていきました。第 3 期は、日本の大手メーカーの発展に合わせて、OEM でブランド品の受託製造を増やしたことで、さらに会社が大きくなった時期です。これにより、「配置薬」、「OTC 医薬品」、「大手メーカーのブランド品の受託」の製造環境が整いました。さらに第 4 期は、2018 年にホシエヌ製薬株式会社を統合したことで、医療用医薬品分野への基盤づくりができました。

創業以来、医薬品製造企業として築き上げて来た品質にこだわる企業風土と、その姿勢に基づき顧客からの信頼をぶれることなく引き継いで行くことに加え、ますますグローバル化し複雑化する経営環境に、社員全員の力を引き出しながら率先して立ち向かい、「チームプレイ」で事業の拡大・

安定に努めていきます。

私は「人の価値」、「物の価値」、「考え方の価値」の三つの価値を大切にする会社にしたいと思い経営に当たってきました。それは、社員一人一人の能力を上げ、人としての魅力、仕事力を磨いていくこと、またものづくりに対する強い探求心を持つこと、さらに社員全員が同じ目標を達成するための前向きで多様な考え方を持つこと、そして常にチャレンジをしていくことです。

**── 御社の拠点はどのようになっていますか**

当社の組織は、74年の歴史の中で大きく変わりました。本社は1963年に奈良県御所市から大阪市の道修町（どしょうまち）に移しました。その他の拠点は東京営業所に加え現在4つあります。まずは、「開発・技術センター」が奈良県の高取町にあります。同センターでは、健康を担う安心・安全な製品を作るべく、高い技術を目指す研究と知恵を絞った開発に取り組んでいます。

そして、当社の一番の基盤である工場が3か所。奈良県御所市にあるのが「本店工場」、先ほどお話した統合により取得した会社が「五條工場」です。そして、和歌山県の橋本市に「紀ノ光台工場」を2019年に竣工、2022年夏に本格稼働します。この三つの工場で色々な分野の生産を行っていくという状況です。

医薬品は、配置薬、ＯＴＣ、医療用医薬品など、その種類や剤形の違いにより、生産方法が異なります。また、この業界では工場ごとにどういった製品を作るのかを予め届け出て、行政の承認を得ておかなければなりません。そのため、工場ごとに作る物が決まっており、承認を得ていない製品は製造できません。それを踏まえて生産戦略を考え、三つの工場に分けて稼働させているということです。

**── 本社移転の目的は**

本社の移転は、2代目の田村恵昭の時です。元々、本社機能は御所の生産工場に併設していました。ところが、生産量が拡大してきて場所の確保ができず手狭になってきました。工場としての機能を最大限発揮するためには、生産に関わらない部署は外に出るべきだということになったのです。もう一つは、道修町は歴史的にも「薬のまち」であり、そこに本社を構えることで会社の知名度を上げるという狙いもありました。

移転の効果はありました。例えば、学生が就職先を選ぶ時、まずはインターネットで検索することが多いと思います。その際、「医薬品メーカー」「大阪」のキーワードで当社はヒットします。さらに大阪には多くのメーカーがあるので、その企業との繋がりを持つことができることも魅力でした。奈良は奈良で業界内は繋がっているのですが、さらに大阪の医薬品業界との繋がりが大きく増えたことで、新たな仕事も増えました。技術のノウハウの蓄積もできましたし、全社員の視野がちょっと広がったなと思っています。

田村大作社長（左）と田村恵昭会長（右）

**── 現在の本社ビルに移転して10年になりますね**

本社を現在の道修町の本社ビルに移して10年の節目の年である2021年に、大きな出来事がありました。本社の隣には少彦名（すくなひこな）神社が鎮座しているのですが、この神社は医薬にゆかりのある祭神を祀っていることから、医薬業に携わる会社・関係者などの信仰を集めています。また、大阪の祭

りは、今宮戎神社の「十日戎」で始まり、少彦名神社の「神農祭（しんのうさい）」（11 月 22 日、23 日）で終わることから、「とめの祭り」としても知られています。

その栄えある少彦名神社「神農祭」の祭典委員長を当社会長の田村恵昭が仰せつかりました。これは非常に光栄なことであるとともに、道修町における当社の存在が認められたのかなと考えています。なお、今年の祭りでは、新型コロナ感染の収束を祈念いたしました。祭典委員長の大役を大過なく果たせたことで安堵しています。

田村会長（左）と少彦名神社・別所賢一宮司（右）

**── 2015 年に社長が交代されました**

田村信一の時代が『種まき期』です、そして、2 代目田村恵昭（現会長）が大きな変革を行いました。先ほどお話ししたように、特に一般用のドラッグストアの分野の拡充と大手 OTC メーカーの受託生産を中心に業容を拡大させてきました。ただ、今後はそれだけではなかなか立ち行かないだろうと考え、私の代は第三の創業期『成長・発展期』であると位置づけました。そこで、就任した時に先を見据えて二つのことを進めたのです。一つは医療用医薬品です。病院向けの薬への進出をやはり進めていかなければならない。「未来にチャレンジする健康開発企業」として、新たな市場、技術に挑戦したいという気持ちがあり、生産力、開発力を上げるために、医療用医薬品の分野に進出したということです。二つめは、これまで事業展開してきたＯＴＣと配置の事業を更に拡充させたいということです。そのためには海外展開が必要です。日本の良い製品を世界に広めていきたいという思いがあります。これまで、中国や ASEAN 諸国に一部商品を供給していましたが、コロナが落ち着いたら海外展開を加速させていきたいと考えています。ASEAN はもとより中東や東ヨーロッパぐらいまでは行きたいという考えは持っています。

そして、大きく成長、発展していく第三創業期幕開けのシンボル的な存在が、和歌山県橋本市の紀ノ光台工場の建設でした。

**── その紀ノ光台工場について教えてください**

紀ノ光台工場については、コンセプトは、「社員が楽しく働ける」です。そして、グローバルＧＭＰに対応しています。これは業界用語になるのですが、ＧＭＰとは医薬品の製造管理及び品質管理に関する基準で、品質の良い優れた医薬品を製造するための要件をまとめたものです。紀ノ光台工場は世界の医薬品生産基準に沿った工場であるべきということをコンセプトに設計されています。

最大の特徴は、錠剤の搬送や保管には小型容器を採用し、小型容器が工程室に自動で運び込まれた後は、打錠、糖衣、錠剤検査及び包装ホッパー投入までの工程間をハンドリングロボットが完全

ハンドリングロボット

自動で生産する新しい製造方式（スマートカンガルー方式）を採用していることです。自動搬送との組み合わせが完全自動化対応となり、人の介在を最小限にした、高い品質と安定供給、コストメリットを実現しています。

敷地面積は約 49,000㎡の 7 階建てです。第一期設備導入で年間 6 億錠の生産能力があり、全部のフロアに生産設備を導入すると最大で年間 12 億錠生産できるスペックがあります。

紀ノ光台工場の全景

**── 場所の決め手は何だったのでしょうか**

新設の工場には、ある程度の広さと高さが必要だったので、まずは広い土地が確保できるということが大きな決め手でした。そして、高い建物が建築可能だったことです。医薬品の工場では重力を利用して材料を下方へ移動させながら製品を作ります。そのため、どうしても高さが必要であり、高さ制限がある所では生産能力が上がりません。御所市の本店工場は、20m しか建てられませんが、紀ノ光台工場は 32m あります。

もう一つは、本店工場、五條工場の 2 つの既存工場の社員が転勤することなく新工場へ移動して働けることです。つまり、工場間のジョブローテーションができることです。御所市、五條市、橋本市は京奈和自動車道で繋がっていることもあり、移動がスムーズに行えます。東日本大震災の後だったので、リスクヘッジということで、少し離れた県にという話もあったのですが、それ以上に少子化が問題になってくると考えました。できる限り少ない人数で多くの物を作りたいと思ったら、災害を考えながらもやはり近くにあって、少人数での対応をしていきたいということで、隣接地に建てたわけです。また、3 つの工場が一度にすべてが忙しいということはまずないので、お互いに助け合いもできるだろうし、社員がいろんなところで働けることでやりがいを感じてくれるというのもあります。

**── 紀ノ光台工場の新設で既存工場との製造の棲み分けはどのようになりますか**

本店工場はドリンクラインを二つ持っていますので、液剤のライン工場として運営しています。800 ラインと 200 ラインがありまして、800 ラインは 1 分間に 800 本生産できる設備です。業界ではかなり大きな方だと思います。

また、この工場では、医薬品の製品とサプリメント・健康食品が作れ、食品関係のメーカーや化粧品関係のメーカーのサプリメントも作っていて、どちらかというと一般消費者、店頭、あと通販メーカー向けの工場という状況です。

五條工場では、医療用医薬品とＯＴＣ医薬品の固形製剤のうち、比較的小さいロットを作っています。大手メーカーのブランド品や病院向けの薬など、国内外問わずここで受託製造しています。紀ノ光台工場では、大規模ロットを賄えるようにしていこうと考えています。

人員体制は、本店工場と五條工場が各 100 名程ですが、紀ノ光台工場は 50 名の設定をして、今 30 名で運営しています。

奈良本店工場のドリンクライン

## ▶業績について

**── 御社の売上高の推移は**

直近の年間売上は 60 億円強です。コロナの影響で、かなり減りました。特に風邪薬、胃腸薬、酔い止めが厳しい。コロナ対策でマスクをすることが風邪の予防になり、風邪薬が全然売れなくなりました。そして、飲み会が減って胃腸薬やドリンク剤が、旅行やドライブが減って酔い止めが減少しました。ただし、紀ノ光台工場が今夏から本格稼働します。受注先はもうほぼ決まっておりまして、中期経営計画の中では、売上目標を 100 億円に設定しています。

比率としては、OTC 医薬品が 50%以上というのが現状ですが、将来的には、時代のニーズに応えられるよう、医療用医薬品が 40%、OTC 医薬品が 45%、健康食品が 15%程度にしたいと考えています。

**── この先の動向をどのように予測しておられますか**

ドリンク市場は二つあって、それは医薬品の市場と食品の市場ですが、医薬品のドリンク市場は特に厳しいかなと思っています。なぜかというと、ドリンクの効能は滋養強壮です。昨今の生活を見ていますと、疲れたときに飲むという状況が少なくなっています。また、若い世代はエナジードリンクを好んで飲んでいます。

そこで巻き返しを図りたいところなのですが、法律上、「飲んだらよく眠れます」とか「明日には倍ぐらい元気になります」とは言えないので、なかなかドリンクの売上げを増やすのは難しいです。そのような中、顧客ニーズは多様化しており、女性に対しての美容ドリンクや睡眠改善など滋養強壮にとらわれないドリンク剤の開発に取り組んでいきたい。そしてターゲットとして日本国内だけではなくて、外国にも打って出たいなと考えています。

## ▶SDGs の取り組みについて

中長期計画で SDGs に積極的に取り組もうと決めました。そこで、当社のこれまでの事業を確認したところ、17 の目標のうち、10 項目についてはすでに取り組んでいることがわかりました。これまで、品質管理を強化してきたことが SDGs とほぼ重なっていたことや、そもそも事業そのものが、3 番目の目標（全ての人に健康と福祉を）そのものだということもあります。

**── 御社で実施している SDGs に関係した事業をいくつか紹介してください**

### ■教育活動と奨学金制度
### （4　質の高い教育をみんなに）

本店工場（御所市）では、薬草園の見学や薬剤師による講義を実施する等、地元高校である県立青翔高校と連携した教育活動に取り組んでいます。また、薬剤師を目指す同校の生徒に対し「育成奨学金制度」を設け、質の高い教育の確保と学習機会の促進に努めています。薬剤師になるために必要な学費が高額であることから、行きたくても行けない子への助けとして大学の学費を一部当社が貸与しており、貸与期間と同期間当社で勤務した場合には返還を免除しています。

さらに、地元名柄小学校の 3 年生、4 年生の社会科見学としてドリンクラインと薬草園を見てもらい、働くことの大切さを学んでもらっています。

### ■女性活躍推進に取り組む
### （5　ジェンダー平等を実現しよう）

これは今、一番の課題になっています。女性活

躍推進に積極的に取り組み、男女の関係なく能力に応じて社内外で活躍できる体制を作っています。女性の管理職の数はまだまだ少ないですけど、着実に増えてきています。

このことが認められ、2020 年に、厚生労働省から「えるぼし認定」（一般事業主行動計画の策定・届出を行った事業主のうち、女性の活躍推進に関する取り組みの実施状況が優良である等の一定の要件を満たす）を受けました。奈良労働局管内では 2 例目、製造業では初めてとのことでした。育児休業取得・復帰の体制を整え、多能工化やジョブローテーション等に積極的に取り組むなど、性別や年齢に関係なく誰もが働きやすい環境への取り組みを進めてきましたが、今後も取り組みを発展させていきたいと考えています。

### ■地域雇用の創出に取り組む（8 働きがいも経済成長も）

奈良県と和歌山県に生産工場を有する企業として、地元自治体との連携を密にし、地元での新たな雇用創出に取り組んでいます。また、意欲ある非正規社員に対しては、積極的に正社員への登用を行い、できるだけ長期雇用できるような体制を取っています。

### ■屋上緑化プロジェクトに参加（11 住み続けられるまちづくりを）

大阪府が推進する「みどりの大阪推進計画」の一環として、道修町地区のビル屋上でワイン用のぶどうを栽培し、屋上緑化を進めるとともに、収穫したぶどうを原料に「大阪ワイン」をつくる「屋上緑化ワインプロジェクト」に参加して、地球温暖化対策に取り組んでいます。

### ■自然災害発生時の事業継続計画（12 つくる責任　つかう責任）

当社は、2021 年 4 月、近畿経済産業局より「事業継続力強化計画（BCP）」に係る認定を受けました。医薬品という人の命を守る商品を作っていますので、欠品になれば大事（おおごと）です。そのため、自然災害が発生しても持続可能な事業体制を構築しています。例えば、台風でどこかが被災して社員が来られなくなっても他の工場から人を融通できるということなどです。また、地震に関しては、紀ノ光台工場は震度 7 でも持ちこたえられるよう、耐震設備に多くの費用をかけました。

## ▶おわりに

**── これからの夢**

社長になったときから言っている夢は、「社員の家族が本当に安心してくれるような会社になりたい」ということです。家族から「働いていてよかったね」と言ってもらえる会社にしたいというのが、私の思いです。だから社員満足度というよりも、家族満足度を追求したいと思っています。

**── 御社のホームページを拝見すると、トップページに「YES, 元気」のフレーズが現れます**

「YES, 元気」の制定は、二代目の社長の時です。一代目の思いを発信しようと、社員から募集しました。そして、「若い心よ、永遠に」を「Young Eternal Spirit」と訳して、その頭文字を取ったら YES になり、それに元気を付け加え「YES, 元気」というフレーズを作り、これを当社の標語にしました。お客さんからも好評で、フレーズとイントネーションがいいので、今も続けています。また、「性別や年齢に関係なく能力とやる気さえ

あれば、いつまでも元気で仕事ができる」というには、ちょうどぴったりだということで、今回の中長期計画でも社員にもっと浸透させていこうと思っています。

**── 奈良県への思いと薬とのかかわり**

全国的に少子・高齢化が進む中、奈良県はやっぱりどうしても若手が少なくなって高齢者が増えてくる。そして奈良県は、大阪のベッドタウンといわれていますけれど、県南部は自営業者や地元雇用の割合が高いように思います。当社の事業基盤である3工場および研究・開発センターは、御所市、五條市、高取町および和歌山県橋本市に位置し、合計で300名程の雇用を生み出しています。当社といたしましては、こうした地元地域とともに発展していきたいと考えています。

また、奈良県は歴史もあり、神社仏閣等の文化を含め観光資源は豊富にあります。しかしながら、宿泊施設の少なさからもわかるように、その観光資源が地域の発展に上手く繋がっていないように思います。

実は、奈良県には薬のストーリーがあり、薬の発祥の地といわれています。日本書紀によると611年と612年に推古天皇が宇陀と高取で鹿の若角や薬草をつむ薬猟を行った記述があり、その後、次第に栽培に移行していったようです。680年に建立された本薬師寺には薬園も設けられました。藤原京跡から発掘された木簡には、生薬名や薬を司る機関名の記載が見つかっており、奈良県は日本の薬のルーツといえます。江戸時代に入り富山とならび置き薬の産業が興り、『大和売薬』として発展してきました。

こうした薬の歴史も踏まえ、奈良発祥の製薬メーカーとして、業界全体を牽引していける企業になりたいと考えています。

（聞き手・文責：丸尾尚史）

**●プロフィール　田 村　大 作　氏**

**■主な経歴**

1973年4月5日生まれ。大学卒業後1996年4月化粧品、医薬品等の容器の商社武内容器株式会社入社。2000年1月田村薬品工業株式会社に入社。営業本部副本部長兼薬粧部事業部長、代表取締役副社長兼営業本部長、生産本部本部長を歴任後。2015年2月代表取締役社長に就任し、現在に至る。

**■座右の銘、好きな言葉**

「チームプレイ」、「疾風に勁草を知る」

**■大事にしていること**

・相手への思いやりと人とのご縁を大切にすること
・仕事も遊びも全力で、苦しい時こそ笑って行動すること

**■趣味**

ゴルフ、格闘技観戦、美ボディトレーニング

**■私のモットー**

・親しき中にも礼儀あり
・いつもポジティブで上を向いて立ち向かう。

**■お勧めの本**

「ほめる生き方」　著者 西村貴好

**■好きな食べ物**

五平餅

**■私のストレス発散法**

ドライブ、ジムでのトレーニング

**■奈良県内で好きな場所**

本店工場と五條工場

**■所属企業の概要**

・会社名：田村薬品工業株式会社
・本　社：大阪市中央区道修町2丁目1番10号T・M・B道修町ビル
・創　業：1934年（昭和9年）
・設　立：1948年（昭和23年）
・資本金：6,000万円
・事　業：①医薬品・医薬部外品の製造並びに販売②食品及び清涼飲料水の製造並びに販売③医療機器の製造並びに販売④薬草栽培
・奈良本店工場（御所市）、五條工場、紀ノ光台工場（橋本市）、開発・技術センター（高取町）、東京営業所